



**来園者の思い出とともに  
歩んできた動植物園**

迫力のある動物の姿に驚いたり、動物を背景に写真を撮ったり、園内の芝生でお弁当を囲んだり、市民の皆さんにも、それぞれ心に残る思い出があるのではないのでしょうか。市亜熱帯動植物園は、そんな皆さんの思い出とともに歩んできました。

同園は、昭和三十六年六月、市民待望の憩いの施設として、全国では二十七番目、西九州では唯一の動植物園として開園しました。市民の皆さんには「石岳動植物園」の愛称で親しまれ、昨年には開園四十五周年を迎えました。

現在、六十七種類の動物、千二百種類の植物を園内で観ることができ、また、展望所から一望できる九十九島の美しい景観も魅力の一つ。国立公園の九十九島を望むという絶好の場所にある同園は、「日本一の景観を誇る動植物園」と言ってもいいかもしれません。

最近、北海道旭川市が運営する旭山動物園が動物の展示方法などを工夫して人気を集めるなど、全国的にも動物園の人气が再び高まってきています。現在、全国には約百六十の動植物園があり、その内自治体が運営するのは六十四園で、長崎県と佐賀県では本市の動植物園だけです。同園は開園以来現在まで、約九百三十万人が訪れています。しかし、入園者数は昭和五十五年度の二十五万人が最高で、その後は減少傾向にあり、平成十六年度には過去最低の十四万人となりました。もし、このまま入園者が減り続け、将来、佐世保から動植物園がなくなるとしたら寂しいと思いませんか。

**命の尊さや動物との共生の大切さをを感じる**

市亜熱帯動植物園では、園内で楽しく過ごしてもらいながら、さらに命の尊さや動物との共生の大切さも感じてほしいと、さまざまな取り組みをしています。

例えば、動物の行動特性に配慮した空間作りとして、昨年、クマ舎やマントヒヒ舎などに、手作りの木製の台やジャングルジムを設置しました。これにより、従来よりも迫力ある姿や生き生きと行動・生活する様子が見られるようになりました。

また、休日を中心に、動物の生態学習会やエサやり体験、ウサギなどの小動物と触れ合えるイベントなども行っています。このような取り組みがきっかけとなり、入園者は楽しみながら動物に親しみ、理解を深めているようです。

さらに、3月には、親を失ったツキノワグマの子ども二頭（オス一頭、メス一頭）を長野県軽井沢町から受け入れ、人工飼育をしています。ツキノワグマは人里に下りて人間に危害を加えることから、地域によっては有害鳥獣に指定され、数多く殺処分されています。しかし、クマが人里にエサを求めて下りてこなければならなくなったのは、人間が森を削り、動物の生活環境を壊してきたことが原因の一つかもしれません。同園では、この子グマを通して、動物と人間の関係や動物との共生の大切さを伝えたいとしています。

市亜熱帯動植物園は、昨年、園の活性化構想を作りました。来園者にもっと魅力を感じてもらえる動植物園にするため、今年度は具体的な計画を作ることになっています。



引き取られたところの子グマ。状態が安定するまではビデオで一般公開中



手作りの木製ジャングルジムで伸び伸びと過ごすマントヒヒ



間近に見るクマの姿は迫力満点！！



# 特集 わたしのまちの動植物園

天気がいい休日。皆さんは何をして過ごしますか。「お弁当を持って、市亜熱帯動植物園に出掛けてみる」というのは、いかがでしょうか。

今回は、市亜熱帯動植物園のさまざまな取り組みや、動植物園の裏側について紹介します。

「動植物園には何回も行っているから飽きちゃった」という人も、「最近、あまり行っていないな」という人も、今度の休日に、出掛けてみませんか。

わたしたちのまちの動植物園の新しい魅力、楽しみ方が発見できるかもしれませんよ。